藤原宮西南隅地域の調査（第34次）

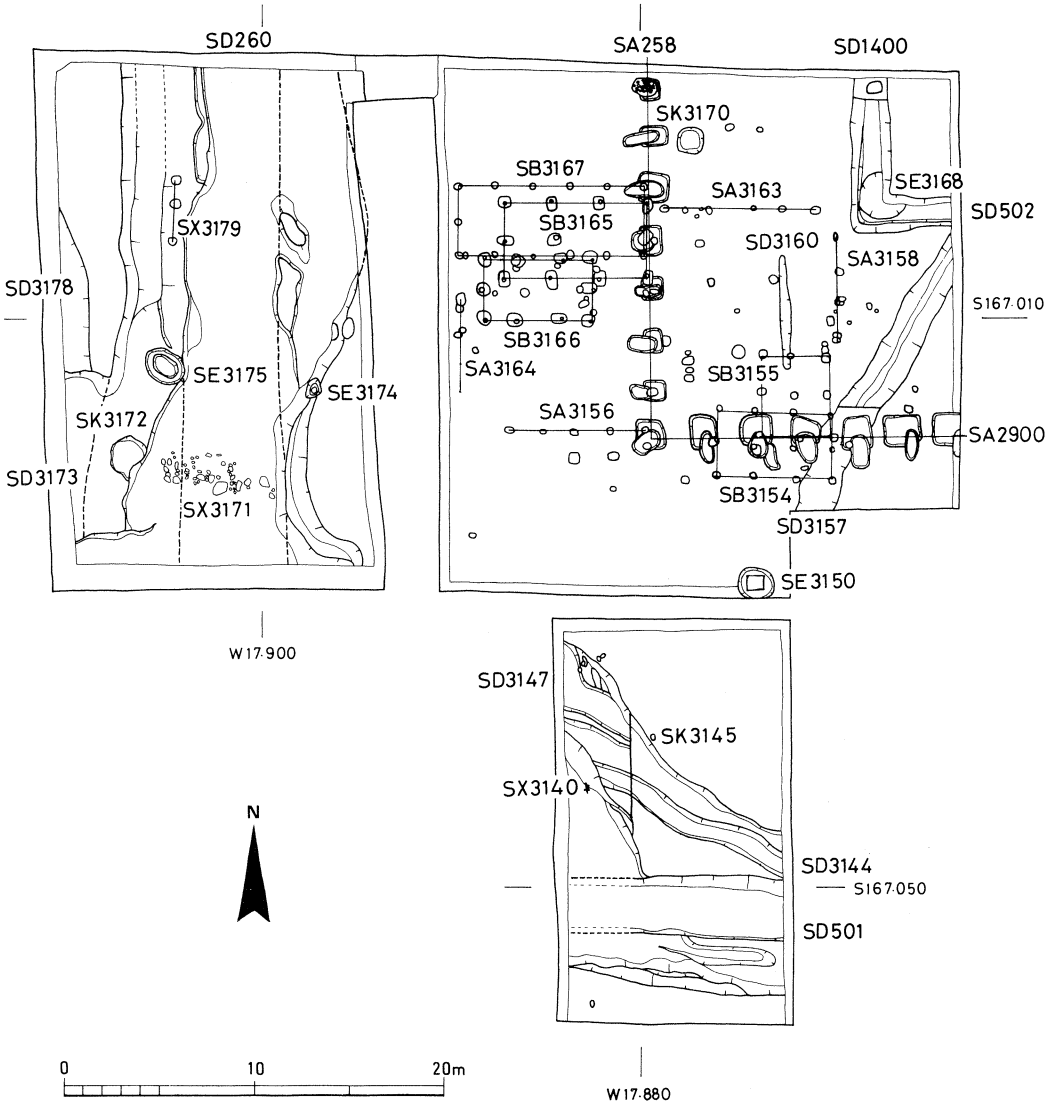
（昭和56年5月～昭和57年3月）

本調査は藤原宮の四至確認調査の一つとして行ったものである。これまで宮の四至に関しては南辺（第1・29－6次），北辺（第18次），東辺（第24・27・29・32次）のそれぞれについて調査を実施しており，外濠，大垣，門などの外郭施設を明らかにしている。しかし，西辺については第10次調査で大垣，内濠を明らかにしたほかは，小規模な調査によって外濠等が一部確認されているにすぎない。このようなことから未確定な要素を含む西南隅の調査を実施した。調査は宮の南面大垣と西面大垣の起点である西南の隅角を中心に，外濠と内濠を含む範囲としたが，外濠の隅角については民家があり，調査に含むことができなかった。

調査区の層序は，北半部では耕土，床土，灰褐色土（中世），暗灰褐色土，暗褐色土，黒褐色土（弥生），褐色粘質土（地山）の順であり，黒褐色土の上面で遺構検出を行った。遺構面までは1.2ｍの深さである。南半部は灰褐色土の下が暗灰褐色土，黄褐色整地土（奈良末～平安），黄褐色地山の順であり，弥生土器を含む黒褐色土がなく，地山直上で遺構検出を行った。

検出した遺構は，藤原宮期，藤原宮期以後，藤原宮期以前の各期にわたる。

藤原宮期の遺構　宮の外郭施設である大垣，内濠，外濠と斜行溝1条がある。西面大垣ＳＡ258は南北方向の掘立柱塀で7間分，19ｍを検出した。柱間寸法は2.7ｍ（9尺）等間である。掘形の大きさは一辺1.5ｍ前後あり，いずれも西側に抜取り穴を伴い，北端の抜取り穴は瓦を多量に含んでいた。南面大垣ＳＡ2900は6間分，16ｍを検出した。柱間寸法は2.7ｍ（9尺）であり，柱掘形は西面大垣より大きく，一辺は1.8～2.0ｍ，深さは1.2ｍ程ある。柱は西端角で西南側に，他はすべて南側に抜取っている。西面大垣を含めて6ケ所で掘形を断ち割ったが，礎板等の痕跡はみられなかった。大垣の内側に沿って内濠ＳＤ1400，ＳＤ502がある。ＳＤ1400は幅2.2ｍ，ＳＤ502は東端で幅1.8ｍあ



第34次調査遺構配置図（1 ： 400）

り，深さはともに0.7ｍである。 堆積土層は上・中・下の三層あり，上層からは多量の瓦が出土しているが，中・下層には遺物が少なく，流水の痕跡は稀薄であった。ＳＤ1400溝心と西面大垣間の距離は11.6ｍ，ＳＤ502溝心と南面大垣間の距離は11.7ｍである。西面外濠ＳＤ260は南北方向の大溝であり，総長27ｍを検出した。後世の氾濫と浸蝕によって著しく拡大，変形しており， 調査区中央付近での幅は約10ｍである。ただ，東岸の南半部６ｍ区間と，西岸北半の直線部分の下肩14ｍ区間には当初の外濠流路の痕跡をとどめている。これから推測

すると，外濠下底幅は５ｍ程となる。深さは南端で1.3ｍ，北端で1.6ｍある。堆積層は底から灰色バラス，灰色粘土Ⅲ，灰色砂，灰色粘土Ⅱ，灰色粘土Ⅰの順で，最下層の灰色バラス層は広がった溝の全域にあり，藤原宮期から平安初期までの遺物を含む。最上層の灰色粘土Ⅰからは10世紀の遺物が出土しており，この頃まで溝が存続していたことを示している。南面外濠ＳＤ501は東西方向の溝で，ＳＡ2900の南24.1ｍにある。20ｍ分を検出したが，溝幅は東端付近では約6.2ｍあるが，氾濫によって南へ広がったもので，溝下底には幅３ｍの本来の流路痕跡を残している。また西半も二次的に溝幅が広がり，北岸は北西方向に斜行して西面外濠ＳＤ260東岸へ向う。この北西へ延びる北岸に沿って丸杭間に板を差し渡したしがらみＳＸ3140がある。溝の堆積層は下からバラス層，灰色粘土層（Ⅰ～Ⅳ層）となり，西面外濠とほぼ同じ状況で，各層は西面外濠ほど厚くなく，深さ１ｍで溝底の絶対高は西面外濠より0.5ｍ高い。斜行溝ＳＤ3151は内濠から南面大垣にかけて北東から西南に流れる幅2.0ｍ，深さ1.5ｍの溝で，内濠，大垣よりも古い。数片の弥生土器が出土しただけで時期を確定できないが，堆積土からみて藤原宮造営に伴う溝とみられる。

藤原宮以降の遺構　宮廃絶直後の遺構と平安時代の遺構に分けられる。

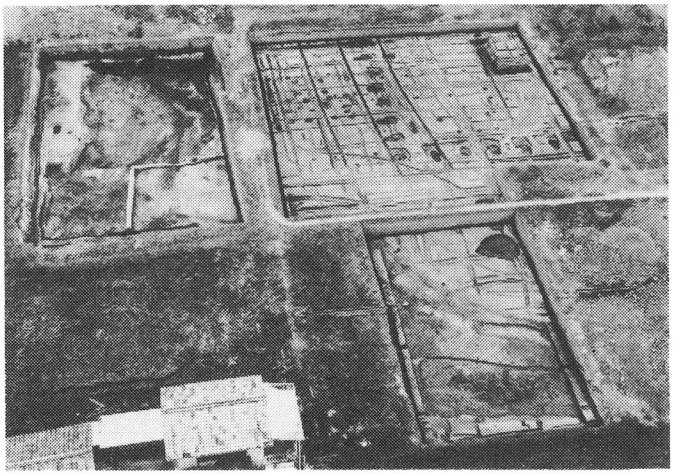
宮廃絶直後の遺構は建物ＳＢ3165・3166の２棟である。ＳＢ3165は西面大垣がとり払われた後に設けられ，桁行３間，梁行２間の東西棟で，北側通りと西妻柱の柱下には瓦と玉石を入れて根固めとしており，東妻柱抜取り穴には桧皮片が入っていた。柱間寸法は桁行1.9ｍ，梁行1.8ｍで，柱径は15㎝程である。ＳＢ3166はＳＢ3165の廃絶後に位置をずらし，規模を縮小して作られる。桁行３間，梁行２間の東西棟で，柱間寸法は桁行中央間が2.4ｍ，両脇間が1.5ｍあり，梁行寸法は2.1ｍである。

平安時代の遺構には掘立柱建物３棟，塀４条，井戸２基，堰などがある。建物ＳＢ3154・3155・3167は調査区北東部にあって，塀ＳＡ3156・3158・3163・3164によって東西20ｍ，南北16ｍの区画を構成している。ＳＢ3167は桁行５間，梁行２間の東西棟で，梁行1.9ｍ，桁行1.8ｍである。柱下には玉石や瓦を用いて根固めしている。ＳＢ3154は桁行３間（柱間寸法1.9ｍ），梁行２間

（柱間寸法 1.8 m）の東西棟で，ＳＢ 3155 は桁行 2 間（総長 4.2 m），梁行 2 間（総長 3.2 m）の南北棟である。ともに総柱建物であるが，掘形の一辺は 0.3 m前後で，柱位置も不揃いである。南面を限る東西方向の塀ＳＡ 3156はＳＢ 3154 の西にある 4 間の掘立柱塀で，柱間寸法は 1.8 m である。建物とともに北を限る東西塀ＳＡ 3163 は 5 間で総長は 8 m である。柱間は不揃いである。東を限る南北塀ＳＡ 3158 は 3 間で，柱間寸法は 1.8 m である。西側の塀ＳＡ 3164 は 1 間（1.6 m）のみを検出したが，門の可能性もある。またこれと対称の位置にある東側の塀ＳＡ 3158 の南端 1 間も門の可能性がある。次にＳＢ 3154 の南 5 m に井戸ＳＥ 3150 がある。一辺 2 m の円形に近い掘形をもち，深さは 2.2 m ある。井戸本体は一辺 1.1 m の正方形縦板組みで，幅22cm，長さ 1.4 m の板を 2 段に立て並べ，上下 2 ケ所を角材の内枠で支えている。井戸底からは10世紀の土器が出土しており，北側の建物及び塀と同時期とみられる。西面外濠の東肩部にある井戸ＳＥ 3174 は曲物を 2 段に据えた井戸で，上段曲物は約40cm，下段曲物は径25cm で底と中段には礫を敷きつめている。時期は決定できない。堰ＳＸ 3171 は西面外濠が半ば埋もれた時期に設けられたもので，最大で径60cm の自然石と人頭大石40余個を幅 1.5 m，長さ 6 m にわたって並べたものである。石列は灰色粘土Ⅱ層上面に据えており，石列間から延喜通宝が出土した。

このほかに，西面外濠の氾濫によってできた西岸中段テラス上には南北方向 2 間の柱列ＳＸ 3179 がある。底部を僅かに残すのみで，構築時期は不明であるが，橋脚とみられる。

また，調査区東半の灰褐色土（中世）上面からは東西20m，南北15 m の



調査地全景（南から）

範囲にわたって牛の足跡多数を検出している。

藤原宮以前の遺構　弥生時代の井戸２（ＳＥ3175・3168），溝１（ＳＤ3144），土壙１（ＳＫ3174）と古墳時代の溝１（ＳＤ3178），小土壙１（ＳＫ3145）がある。弥生時代の井戸ＳＥ3175は上面で長径1.6ｍ，短径1.0ｍの楕円形を呈し，深さは0.8ｍある。内部には木の葉，自然木，繊維質腐植土が堆積しており，畿内第Ｖ様式の弥生土器一括，編物片，加工板材が出土している。古墳時代の小土壙ＳＫ3145は南面外濠の北側にあり，径が0.3ｍ，深さ0.15ｍと小規模であるが，サヌカイトの石器剥片45点が詰っていた。

出土遺物　木簡，土器類，瓦類，土製品，木製品，銭貨，自然遺物などがあり，ほとんどが外濠から出土している。木簡は西面外濠底（バラス層）から１点出土した。上・下を欠失している。

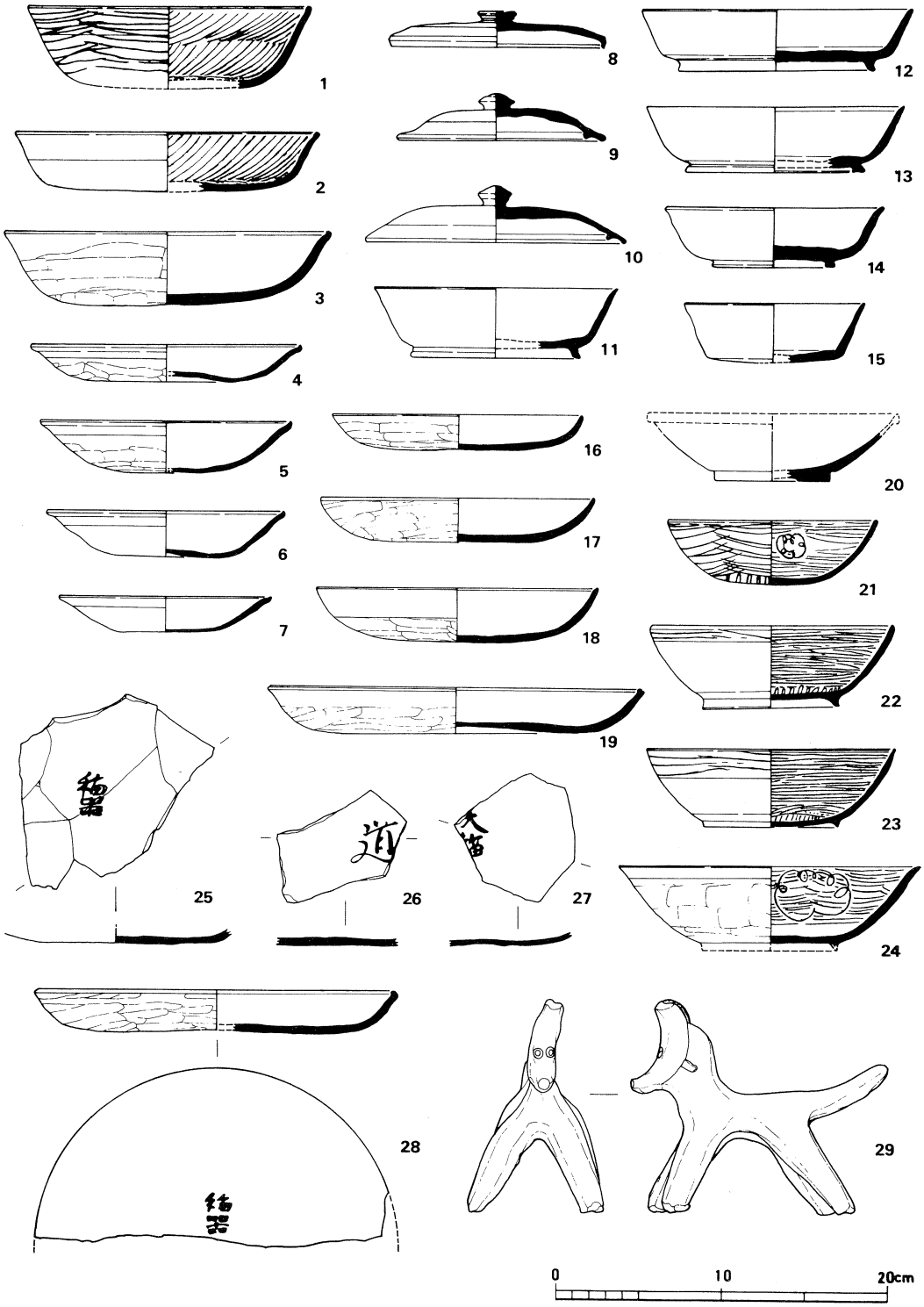
（表）　□□欲□ミ□

（裏）　五□八月十九□　　(74)×(26)×4（㎜）
〔年ヵ〕

土器は外濠から土師器，須恵器，黒色土器，施釉陶器（緑釉，灰釉），瓦器，製塩土器が出土している。墨書土器は12点出土した。奈良～平安時代の土師器，須恵器の杯・皿・蓋に墨書したもので，「稲器」，「米」，「道」，「凡」などである。このほか外濠出土の土製品として円面硯，土馬がある。瓦類は軒丸瓦７型式10点，軒平瓦21型式72点，丸・平瓦が出土した。内訳は別表のとおりであるが，西面外濠が最も多く46点，南面外濠５点，内濠７点，西面大垣抜取り穴１点，その他となっている。軒丸瓦中には薬師寺所用瓦6276Ｅが１点あり，

	型　式	点数		型　式	点数	型　式	点数	型　式	点数
軒	6233－B	2	軒	6561－A	11	6641－H	2	6647－E	1
	6273－B	2		〃〃－B	1	6642－A	1	6663－I	1
	6274－Ab	1		6641－Aa	2	6643－B	1	四重弧	1
丸	6275－D	1	平	〃〃－Ab	1	〃〃－C	1	不明	4
	6276－E	1		〃〃－C	2	〃〃－D	1	合計	72
	6276－新	1		〃〃－E	13	6646－A	1		
瓦	6281	2	瓦	〃〃－F	22	〃〃－Ba	1		
	合　計	10		〃〃－G	2	〃〃－G	3		

第34次調査出土瓦表



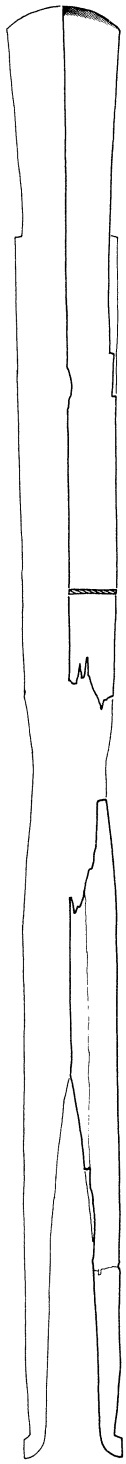
出土土器実測図（20のみ灰褐色土，他は西面外濠出土）

6276系の新型式1点が含まれている。軒平瓦は6641型式が過半数を占め，6561Aがこれに次ぐ。6641G・H，6663Iは薬師寺所用瓦である。木製品には等身大人形1点，削り掛け3点，陽物形板状品，曲物，槽があり，いずれも外濠から出土している。銭貨は隆平永宝1点（外濠底バラス層），延喜通宝1点（外濠灰色粘土I層）であり，自然遺物は馬骨（外濠各層），イノシシ骨（外濠灰色バラス層），桃核である。以上のほかに弥生時代の遺物として土器（第Ⅲ～Ⅳ様式），銅鏃1，分銅形土製品1，石器（石包丁，石槍，石鏃）がある。

まとめ　本調査で宮の西南隅の様子が明らかになったが，これまでの調査の成果と比較しながら要約としたい。

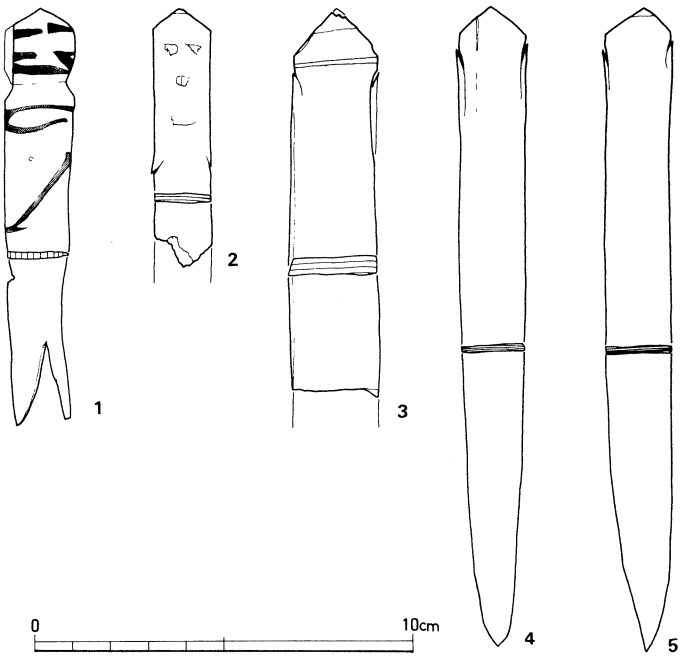
宮大垣が掘立柱塀で，外濠・内濠を伴うものであることは従来の調査の所見と同一である。南面大垣，西面大垣ともに柱間寸法は2.7m（9尺）と等しいが，掘形は西面大垣では形，大きさが不揃いであるのに対して南面では形が大きく，揃っている。このことは西面と南面では造営の単位の違いがあったことを示している。なお，西端隅角から宮南面中門心までの距離は460.14mであり，これまで得られている東西大垣間距離925.4m（3120尺）の½の数値よりやや短い。西面外濠は氾濫による変形はあるが，幅10m近くある。西面北門と中門との間で行った第23－5次（概報10）でも幅10m，深さ1.9mが確かめられており，西面外濠は東面や北面の外濠幅の2倍の規模であったことが改めて明らかになった。なお第23－5次では大垣・濠心距離は20.7mであったが，本調査でもこれと近似し，西岸上肩を濠西端とした場合22,7m，下肩を西端とするとほぼ21mとなる。西面外濠は藤原宮廃絶後にも引き続き水路としての機能を保っていたらしく，最下層の厚いバラス層の堆積状況から相当な水流が

出土銭貨（実大）


外濠出土人形
（1：8）

あったことを推測させ，10世紀後半までは溝幅も広く，堰が設けられるほどであった。

また，堰が埋没した後にもなお数層の砂質土の堆積が認められ，これより瓦器が出土することから，外濠が完全に埋没するのは11世紀頃と考えられる。



西面外濠出土木製品

濠の埋没年代については，第23－5次調査でも同じ所見が認められていることから，東面や北面の外濠が宮の廃絶後速やかに埋没，埋めたてられたのと異なり，後世まで周辺の水路として利用されていたことを示している。

南面外濠の位置については，大垣と濠心距離は24.1ｍある。この数値は第29－6次調査（概報11）の大垣と濠心距離24.75ｍに近い。ちなみに東面外濠心と大垣間距離は20ｍ，南面中門位置では21ｍであるから，南面外濠は西半部で4ｍ程ずれていることになる。濠の堆積状況は西面外濠と似ており，10世紀末から11世紀頃まで溝の機能を持っていたようである。西面外濠を含めて，宮の西南隅は飛鳥川に近く，おそらく飛鳥川からの水を利用することと深く関連しているが，この利用が藤原宮の時期からすでに行われていたかどうかの資料は，今回の調査では得られなかった。